

桜蔭俳話会 六月句会 (第三二六回)

平成二十六年六月二十一日 (土)

会場・旭区民文化センター (サンハート)

口角に昭和の匂ひ青トマト

才美

【鑑賞】

口は何か物を食べるとき、その物が入る入口である。また、口は何か言葉を発するとき、その言葉が出ていく出口である。

評者が青春時代を過ごした昭和の年代は、いわゆる第二次安保に引き続いた、学生運動全盛の時代である。今から思えば、理想論に燃えた主張かもしれないが、それこそ口角に泡を飛ばせて青臭い議論に終始したものである。

上五と下五を直結して、「口角の青トマト」と読むとき、「昭和の匂ひ」はまさにこの時代を形容するのにぴったりである。「昭和の匂ひ」、は上五と下五の連結詞語として、遊離することなく機能している。

鞭軽く入れて夏野の十五歳

守

【自句自解】

旧年、隠岐の島に吟行したときの光景である。放牧されている牛の数が人口数を遥に超える島であるが、天然牧場には馬も何頭か放たれていた。まだ中学生と思われる少年が、軽く鞭を当てる牛の群れに向って走り去って行った。

へなへたと捲る新聞梅雨ぐもり

弘子

【鑑賞】

梅雨どきの新聞紙は配達されたばかりであっても、湿りを吸って少しへなへなしているように思える。そのような気持ちで新聞を捲ると、雨に濡れていなくとも少しよれよれのように感じられる。記事の内容によっては、虚脱感が増幅される。「梅雨湿り」とせず、「梅雨曇り」としたのが良い。

二階なら伸ばせば届く枇杷の枝

眞壽

【鑑賞】

民法二三三条に言う隣地の果実の收受の問題である。「枇杷の枝」とは、「枇杷の実をたわわにつけた枝」という意味に使っているであろう。枇杷の「枝」そのものを言っているのであれば、季語とはならない。二階の窓やベランダから身を伸ばすときには、くれぐれも転落しないように。

日雷歯削る医師の独り言

秀一

【鑑賞】

読み下すときにぎくしゃくとした抵抗感のある一句である。「歯削る医師」は普通に言えば歯医者であろうが、作者は敢えて「歯削る医師」と言っている。このような言い方をする事によって、嫌々歯科医院に来た患者の不安感が良く出ている。その歯科医は「もっと早く来ればよかったのに」と独り言をぶつぶつ言ってい

るのかもしれない。

愛用の木綿のブラウス瓜きざむ

弘子

【鑑賞】

「愛用の」と言われると、反論の仕様がなない。そうですとねと言う他はない。色々な衣類や生活用具類にも使える便利な言葉である。それだけに「愛用」を濫用すると、効能が希釈化しやすい。「愛用」という観念を具体的な物に託して言えれば更に良いのであるが。

海にみて海に染まらぬ海月かな

守

【自句自解】

「朱に交われれば朱くなる」を潔しとしない、自立自存の海月である。

われ先に風追ひかける青田波

才美

【鑑賞】

稲の葉先は風に吹かれて揺れ、順次に風を送っているのであるが、視点を変えて風から見れば、その様子は風を追われた葉先が我先に逃げ回っているようにも見える。ときには視点を變えて対象物を見ることも大事である。

草茂る古寺に鯉鮓の発祥碑

明美

【鑑賞】

その場所にこちらから出向かなければ作れない一句である。古寺の庭の一角に苔むした発祥碑があると言うことよって、鯉鮓の食文化史における位置づけを考えさせられる。

ばら園の初恋といふばらの色

弘子

【添削】

ばら園の「初恋」といふばらの色

顔と顔見える関係さくらんぼ

才美

【鑑賞】

広い観光農園で脚立に乗ってさくらんぼ摘みしているとき、がさがさと隣の枝の中から見知らぬ人が顔を出す。この二人の顔は、さくらんぼ狩に興じた嬉しそうな顔である。この顔と顔が見える関係は楽しいものであるが、近所付き合いが希薄化している今日では、次第に消えていく。

笑い話ではないが、同じ部屋にいる社員同士が、パソコンに向かってインターネットメールを介して、打合せをしているという。

一村の廃れ筍流しかな

明美

【鑑賞】

筍流しは筍の季節に吹く南風の事。よく手入れされた竹林は村民に筍の恵みを与えるだけでなく、切り出された大小の竹材は農業資材や民具材料として様々に活用されている。その村は冷たい響きのある行政用語の限界集落を超え、いま廃れ果てている。竹林を管理する住民はもういない。荒れ果てた竹林には風が吹き寄すだけである。まさに客観写生の極致の句である。

草取りや終の住処と決めたはず

弘子

【鑑賞】

「終の住処」のフレーズは、どの俳句雑誌や結社誌を見ても毎月のように出てくる普通の句材である。この句を類型句の範疇から抜け出させているのは、「決めたはず」のフレーズである。

決定に至る判断要素には色々なものがあり、大方の判断要素を考慮して行なった決定が、その後の事情変更によって今の自分の意に沿わないものとなっていることは、日常経験することである。若いときには庭仕事を楽しめる一戸建て住宅を選択したが、足腰がだんだん衰えると、維持管理が簡単な駅近くのマンション住まいに変わる人がいる。住まいの選択という人生の重大事を、作者が「決めたはずなのに」と軽く流したところに、円熟した余裕を感じる。

緑蔭に殉死者を連れ大名墓

明美

【添削】

殉死には連れ立つの意味が既に入っているから「連れ」は要らない。言葉を整理すれば、次のようになる。

緑蔭や大名墓の殉死の名

どこよりも遅き夕闇芥子の花

才美

【鑑賞】

芥子の花の周りは、夕闇が達するのが遅いと作者は言っている。花明りである。物理的には同じ経度緯度にあるならば、等しく夕闇が来ている筈である。これが常識というものである。しかし、俳句は常識に従っているだけでは、凡庸な句に終わるだけである。ときには固定観念から自らを解き放ちたいものである。

作者は「夕闇がどこよりも遅い」というレトリックを用いることによって、芥子の花の存在を際立たせている。

空と海とけ合う瀬戸の梅雨ぐもり

幸

【鑑賞】

空と海の一体化を詠んだ句である。梅雨ぐもりの季語の選択がよい。普通は大海原を眼前とした句立てが多いが、作者は視野が限定された瀬戸を眼前としている。瀬戸の梅雨ぐもりに着眼したのが良い。

筒鳥の声夢の中へ融けてゆく

ヤエ子

【鑑賞】

鳥の声が「夢の中に融けてゆく」という把握が良い。前日の山歩きの途中たびたび耳にした筒鳥の音が、今日も早く起きて出発しようよと、呼び掛けているようである。山行をよくする作者ならではの一句である。

草茂る奥にからくりありそうな

才美

【鑑賞】

鬱蒼と茂った草むらの背後に何かのからくりが潜んでいるかも知れない、と作者は言っている。暗闇に対する恐怖や畏怖は先史時代に人間の遺伝子に組み込まれているのかも知れない。そのからくりは、ある意図のもとに人為的に造られたものか、自然の営為の結果生まれたものなのか。

歴史的仮名遣いに従えば、「そうな」は「さうな」となる。

朝顔の鉢風呂敷に老施設

幸

【添削】

綺麗に咲いた朝顔を風呂敷に包んで、老人介護施設の知人の見舞いに出かけたとの句である。

しかし「老施設」の用語は日本語として曖昧である。老朽化した施設と受け取られかねない。また、老人は自宅介護されていることもある。

そうすれば、「施設」にこだわる必要はないのではないか。施設介護と自宅介護の両者を含めれば、「見舞い」と言った方が広くなる。とすれば、次のようになる。ただし、「朝顔」は秋の季語である。

朝顔の鉢風呂敷に見舞ひけり

数本の瓶のあじさい重重し

ヤエ子

【添削】

重たげに甕のあぢさゐ三、四本

腹心の友との語らい短夜や

邦子

【添削】

腹蔵のなき語らひや明易し

八重十葉安産寺の母娘かな

幸

【添削】

八重十葉安産寺の母娘

麦秋やPATCHワークの広がれり

ヤエ子

【鑑賞】

刈入れの済んだ麦畑とこれからの麦畑が織り成す地の模様を、パッチワークと形容することは、普通に行われているが。

梅雨晴間干し場いっぱい風流る

邦子

【鑑賞】

梅雨晴間に洗濯に勤しむのは普通のことであるから、これだけでは新規な俳句とはならない。干し場いっぱい吹き渡る風を持ち込むことによって、気持ちの良い句が得られている。

出陣の蟻の隊列みだれなき

ツル子

【鑑賞】

出陣の蟻の隊列と言われると、その蟻は国家によって消耗品のように使われた歩兵の隊列を想起させられる。南米にいる軍隊アリとは明確に異なるが、日本にいる蟻も大きな獲物に対するときは、隊列を組んで進んで行くのである。乱れなしと言うことによって、他の昆虫に狙いを定めた蟻の集団意思の不気味さが読み取れる。

みちのくの仔蛙貰いネオン街

幸

【鑑賞】

「ネオン街で仔蛙を貰った」という事を俳句に取り入れようとする作者の意欲には敬服する。取り合わせの句として意表を衝くものである。ただし、「仔蛙」が蛙の子であるとすれば、これは春の季語である。

夏の句であるとするならば、「小さき蛙」と表記したい。同種の普通の大ききの蛙と比べて、体の大きさが小さい、矮小化された小型の蛙の意味である。

これに「みちのくの」を冠すると、矮小化の原因として、あの原発事故の放射性物質の影響かと考えざるを得ない。ネオン街で突然変異による小さい蛙を貰った、または、そのような話を耳にしたとすれば、「みちのくの小さき蛙やネオン街」のような句立てとなる。ゆゆしき事態の告発の一句である。ネオン街には除染作業の従事者も出入りしている筈であるから。

山笠の棧敷の骨の組上がる

明美

【鑑賞】

勇壮な祇園山笠の準備が着々と進んでいる。山笠を楽しむにしている町衆の気持ちは、見物棧敷の骨組みが組み上がっていく様子を見るだけでも掻き立てられる。

触れ合つて伝令なめらか働蟻

ヤエ子

【添削】

触れ合へど言葉は洩れず蟻の列

虹の帯試験がんばると中学生

ヤエ子

【添削】

中学生の試験鉢巻き虹の帯

青春の熱き日想う蘭の花

眞壽

【添削】

青春の熱き一日蘭の花

父の日や面影似たる人のあり

友子

【添削】

父の日や父似の人とすれ違ふ

山門を出づるやまさにほととぎす

友子

【添削】

山門を辞する刹那のほととぎす

青嵐窓から見ればハワイ島

直子

【添削】

青嵐窓一面のハワイ島

遍路道疲れし体の若楓

邦子

【添削】

遍路道疲れを癒す若楓

紫陽花を一朵飾りて夢描く

眞壽

【添削】

紫陽花の飾る一朵や夢一つ

夜の明けぬ唱歌聞こへし夏は来ぬ

ツル子

【添削】

夏は来ぬふと口をつく愛唱歌

「夏は来ぬ」が唱歌の題名であるとする、これは季語としての使用にはならない。

これがその標の花と連れに言ふ

直子

【添削】

これこそが樗の花と告げにけり

三味の音の流るる門辺梅雨の月

友子

【添削】

三味の音の洩れ来る門や梅雨の月

遠雷の道路工事の音忙し

ツル子

【添削】

遠雷や道路工事の音忙し

寝られぬワールドカップ竹落葉

直子

【添削】

眠られぬワールドカップ実梅落つ

声小さく親の後追ふ鴉の子

友子

【添削】

親の後追ふ鴉の子声小さし

夏木立パリの夜景は暮れなずむ

眞壽

【添削】

夏木立パリの夜景へ沈みけり

短夜を日付の変わる時報かな

弘子

【添削】

短夜の日付の変わる時報かな

垣越へし今朝も実梅のまた二つ

ツル子

【添削】

垣越への実梅の音やまた二つ

らつきょうを漬けて夜半の金魚鉢

幸

【添削】

らつきようを漬けて夜半の渋茶かな

サッカーはゴールが割れず夏来る 直子

【添削】

サッカーのゴールの遠し梅雨に入る

ただし、サッカーは冬の季語。

梅雨の寺町特攻の旅籠あり 明美

【添削】

荒梅雨の特攻兵の旅籠かな

大輪のバラ咲き揃う友の家 眞壽

【添削】

大輪の薔薇に埋もれし朋の家

亡き祖母の姿見え来る更衣 邦子

【添削】

亡き祖母の姿ならむや更衣

父の日や届かぬ手紙描きをり ツル子

【添削】

父の日や父へ届かぬ手紙書く

青々と種から育つ枇杷の実 直子

【添削】

青々と実生の枇杷の実のたわわ

一息や薄茶若葉の寺の庭 邦子

【添削】

一服の薄茶若葉の寺の庭

(不在投句 古野明美、京林眞壽)

「事務局からお知らせ」

○七月句会

・七月二十七日(日)午後一時

・場所 旭区民文化センター・サンハート(相鉄線二俣川駅ライフ五階)

○八月は、句会は休みです。